

作物名：うめ
病害虫名：灰星病

(病原：*Monilinia mumeicola*、*Monilinia fructicola*、*Monilinia laxa*)



写真1 果実の病徴



写真2 灰星病菌の分生子

1 被害の特徴と診断のポイント

- 花、葉、果実、枝に発生する。
- 果実では、収穫が遅れ完熟したときに多発する。初めは水浸状の円形病斑が現れ、比較的速やかに病斑が広がり、表面に灰褐色粉粒状の塊が密生し、果肉は軟化腐敗する。まれに幼果にも発生するが、果実がしぼんで垂下し、表面に灰褐色粉粒状の塊を生ずる。
- 花や若葉では水浸状の病斑が広がって萎凋垂下し、果実同様の灰褐色粉粒状の塊を生じて、花ぐされ、葉ぐされ症状となる。
- 枝では主に罹病部に接して病斑が広がり、翌春この病斑上に分生子を形成する。
- *M.mumeicola* による被害では2年生枝に激しい枝枯れ症状を表すのが特徴である。また、*M.fructicola* による一症状として、葉や果実に赤褐色斑点症状が報告されている。

2 伝染源及び伝染方法

- 本病菌は、菌核化した被害落果上に形成される子のう胞子や前年の被害枝病斑上に形成される分生子が第一次伝染源となる。
- 冬季に枝の枯死部表面に分生子塊が形成され、花蕾が膨らみ、花弁がみえるころから分生子が飛散しはじめ、花器に感染する。花器が腐敗し、そのまま枝に付着し続けると、枝発病に進展する。病斑部が枝を一周すると、養水分の流れが遮断され、腐敗部から先端部が枯死する。また、腐敗した花器が果実に付着すると果実も発病し腐敗する。

3 発病しやすい条件

- 本病菌は糸状菌の一種で、子のう菌類に属する。
- *M.fructicola* は、菌糸の生育、分生子の形成適温は25℃付近である。*M.laxa* の分生子の形成適温は10℃付近で良好であり、前者より低温性である。
- *M.mumeicola* では開花始期～落花期に雨が続く場合に発生が多い。品種では、竜峡小梅、信濃小梅で発生が多く、白加賀は弱小枝で発生が多い。

4 防除方法

- 夏季および冬季せん定時に枯れ枝除去を徹底する。
- 罹病果実はほ場外へ持ち出し、土中に埋設するなど適切に処分する。

5 出典

(1) 参考文献

- 日本植物病害大辞典（全国農村教育協会）

- ひと目でわかる果樹の病害虫第三巻（改訂版）（日本植物防疫協会）
- 北日本病虫研報 59:109-112（2008）

(2) 写真

- 宮城県病害虫防除所撮影

（令和5年9月改訂）